

本の情報	内容
<p>『ゆきがふる』</p> <p>蜂飼耳ぶん 牧野千穂え ブロンズ新社 2013.10</p> <p>1110733877</p>	<p>しんしんと降りつもるゆきの中、ゆきの日だけにあらわれる道を見つけた子うさぎのふうちゃんは、その先へ行ってみることにします。そこには「ふわふわころり」の家があり、美しいゆきを降らせる「ゆきぐも」もやってきました。ふうちゃんは、熱をだしている妹のために、大切なおもちゃとひきかえに、ゆきを降らしてもらう約束をします。家に帰ったふうちゃんは、もう帰ってはこないお父さんからもらった車のおもちゃを、庭先に置くのでした。</p>
<p>『いのちの木』</p> <p>ブリッタ・テッケントラップ作絵 森山京訳 ポプラ社 2013.9</p> <p>1110711969</p>	<p>歳をとり、からだが弱ったキツネは、お気に入りの場所からからだをよこたえました。そして、二度と目を開くことはありませんでした。仲間たちは悲しみ、キツネとの思い出を、思い返していました。あるとき、キツネがたびだったその場所から、オレンジの芽がでてきました。キツネの思い出が語られるたびに、その芽はのびていき、森のみんなが住めるくらいに大きくなりました。キツネはみんなの心のなかに、今も、生き続けているのです。</p>
<p>『図書館に児童室ができた日』</p> <p>ジャン・ピンボロー文 デビー・アトウェル絵 張替恵子訳 徳間書店 2013.8</p> <p>1110700034</p>	<p>1870年ごろ、アメリカのメイン州に、アンという名の女の子が住んでいました。アンは、自分の考えをしっかりと、ものがたりや詩が大好きな子でした。しかし、そのころ、子どもは本なんか読まなくてもいいと考えられており、図書館にも入れてもらえませんでした。やがて、成長したアンはニューヨークで勉強し、図書館で働くようになりました。1911年、新しくニューヨーク公共図書館ができるとき、アンは子どもたちみんなのために、素敵な児童室を作りました。図書館に初めて児童室をつくった、アン・キャロル・ムーアの生涯を紹介した絵本です。</p>
<p>『おかあさんの顔』</p> <p>ロディ・ドイル文 フレヤ・ブラックウッド絵 石津ちひろ訳 フレーベル館 2013.10</p> <p>1110745680</p>	<p>シボーンが3才の時、おかあさんは亡くなってしまいました。シボーンは、おかあさんとの思い出をはっきりと覚えていましたが、その顔を思い出すことができずに寂しい思いをしていました。ある日、シボーンが公園にいると、知らない女の人が声をかけてきました。そして、シボーンの話を知ると、鏡を見るように言いました。家に帰って鏡を見たシボーンは、自分と同じくらいの年のおかあさんの顔を見つけます。</p>
<p>『しろうさぎとりんごの木』</p> <p>石井睦美さく 酒井駒子え 文溪堂 2013.10</p> <p>1110733670</p>	<p>しろうさぎは、森のなかの小さな家でうまれました。玄関わきにある一本のりんごの木は、秋になるとまっ赤な実をつけます。しろうさぎのおかあさんは、その実でジャムやコンポートを作ります。ある日、はじめてりんごのジャムを食べたしろうさぎは、そのおいしさにびっくりに。さっそく明日、りんごの木をこっそりかじってみようと思います。愛情につつまれて幸せにくらす、しろうさぎのすがたが描かれています。</p>
<p>『さみしかった本』</p> <p>ケイト・バーンハイマー文 クリス・シーバン絵 福本友美子訳 岩崎書店 2013.9</p> <p>1110715224</p>	<p>うぐいす色をしたその本は、たくさんの子どもたちに読まれて幸せでした。でも、古くなり、ページも破れ、忘れ去られてしまいました。ある日、1人の女の子がその本に気づきました。借りて帰った女の子は、何度も何度も読み返しました。女の子は、その本をもう一度借りたいと思い、図書館の棚を探しますが、見つかりません。女の子はだんだんとその本のことを忘れていくのですが…。図書館の片隅でさみしくしていた本が、女の子の大切な一冊になるまでのおはなしです。</p>